

「木育(Education)」×「ユーザ(Userbility)」＝「新価値(Unprecedented)」？ 開催報告

木村 彰孝（居住性研究会代表幹事・広島大学大学院教育学研究科）

2018年2月27日（火）の10:00～12:00に東京大学弥生講堂一条ホールにおいて、一般社団法人日本木材学会居住性研究会と日本生理人類学会 Wood/Human Relations 研究部会の主催、日本生理人類学会ものづくり研究部会と公益社団法人日本木材加工技術協会木質仕上げ部会の共催、国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所の後援により合同講演会を開催いたしました。

木材が人に様々な良い効果をもたらしうる（≒少なくとも悪さはしない）ことは、木材関連業界の共通認識といえますが、この効果が科学的なエビデンスにより示された例は決して潤沢ではありません。今後、「木材と人」に関するエビデンスを蓄積し、これまで利用されていない新たな分野への木材利用を推進するためには、様々な分野との融合が不可欠ではないかと考えられます。

そこで、「木育」と「ユーザ・サイエンス」の視点から「木材と人」に繋がる研究・実践について話題提供頂くことで、「木材と人」に関する研究や製品への「新たな価値」の気づきを得ることを目指し、2名の講師の方々にご講演頂きました。

「木育の立場から木材と人に関する研究に期待すること」

熊本大学教育学部 教授・副学部長 田口 浩継 先生

まず、木育の意義と必要性の過去・現在・未来について、特に国産材の利用推進や木材・森林の利用と人との関係性などの視点から、次に先生がこれまでに行われてきた木育の取組み(教材、実践方法、実施体制・連携づくりなど)や木育を進める上でのポイント・ノウハウ、木育活動の課題についてご講演頂きました。ご講演の中で、木材の良さを科学的に示すデータを子どもなどの専門の知識の無い方でも分かりやすい形で提供することと共に、木の良さを感覚的に得る・原体験を豊かにすることのできる場を子どもの頃から提供することの必要性、などについてご提言頂きました。



「ユーザ・サイエンスから見る木材」

千葉大学大学院工学研究院 教授 下村 義弘 先生

まず、デザインに関する問題点と人間の科学に基づいて考えることの必要性について、ユニバーサルデザインとアフォーダンスの誤解から、人間の科学に基づくデザインの方法について、生理人類学におけるキーワード（生理的多型性・全身的協関・テクノアダプタビリティ）からユーザ・サイエンスの評価例を示しながらご講演頂きました。最後に、木材の良さを示すためには、“木ありき”では考えないこと、ヒトの生理的特徴や生理反応に目を向け、現象の整理にとどまらずそのメカニズムを追及することが近道であること、などをご提言頂きました。



年度末の多忙な時期の開催に関わらず、85名の皆様にご参加頂きました。そのうち、半数以上が企業等の一般からご参加頂いたこと、質疑応答や参加者を対象に実施したアンケートの結果から、「木材と人」に関する研究・教育に対する関心と期待の高さが伺えました。

今回は「木育」と「ユーザ・サイエンス」という異なる分野から「木材と人」についてご講演頂きましたが、両先生の講演内容やご提言が最終的に一致したものとなっていたように感じました。本講演を通して、今後「木材と人」に関するエビデンスを蓄積し、これまで利用されていない新たな分野への木材利用を推進するための重要な視点を共有することができたのではないかと考えております。

最後になりますが、ご多忙の中ご講演をお引き受け頂きました2名の講師の先生方、全国各地からご参加頂きました多くの皆様に厚く御礼申し上げます。次年度以降も講演会やワークショップ、見学会等を企画していきたいと考えております。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

